

平和への一歩

大浜中学校 二年
比屋定 賢弥

「平和な島に基地はいらない。基地のあるところが、常に狙われる。」この言葉は与那国島に住む八十代のおばあさんが、テレビのインタビューに答えていた言葉です。

僕の祖母は日本最西端の島、与那国島で暮らしています。僕は幼い頃から、夏休みや春休みには毎年のようにそこへ遊びに行きます。与那国島は、本屋やレンタルビデオ店、コンビニエンスストアなどはなく、とても静かで自然豊かな島です。普段は目にするのできない珍しいトンボや蝶などを目にする時、そこで育っていないけれども、与那国島で生まれた母の血が流れていることをありがたく思います。また、祖父の畑では果物を栽培しており、果物が大好きな弟は、散歩のついでに畑へ行き、実っている果物をその場でもぎ取って食べます。その弟の満足気な顔が最高で、本当の幸せや喜びってこんなことなんだと思います。

そんな与那国島に数年前から不穏な空気がただよいました。島に自衛隊基地を配備するというのです。僕は初めて話を聞いた時、耳を疑いました。与那国島に、あの自然いっぱい、開発とか都市化と無縁だった島に自衛隊基地……。なぜ、どうして。あまりにも突然で島に不釣り合いな話に、僕の頭と心は疑問と不満が渦巻いていました。

また、あろうことか、もっと嫌なことが起こってしまいました。人口わずか千六百人程度しかない島であるのに、賛成派と反対派が生まれてしまったのです。僕は基地ができることを嫌だと思っていました。それ以上に島が二分されてしまったことに啞然としました。そして、なぜ与那国島なのかと憤慨しました。

僕なりに調べると、基地配備に賛成している方々の意見は、基地が造られることによつて、人口が増え、経済が良くなるからだそうです。

しかし、僕は基地ができて与那国島の人口が増え、経済が豊かになつたとしても、島本来の良さが消え、さらに島の人達が毎日安心して暮らすことができなくなれば意味がないのではないかと思いました。「多少貧しくても、毎日安心して暮らしたい。祖先から代々受け継がれてきた土地や豊かな自然を守り、それを子どもや孫に受け継いでもらいたい。そのためにこの島で一生懸命頑

張っているんだよ。」僕の祖父はそう語ります。祖母も「この島は、どうなるのかねえ。」とよくこぼします。島自体だけでなく島人の心の行く末までも案じているのです。

そもそも与那国島に自衛隊を配備する政治的な理由は、与那国島が日本の一番西に位置しており、中国や朝鮮などが攻撃してきた時、日本を守ることができからだそうです。要するに、武力に対抗する場所として与那国島は最適な場所だと判断されたというわけです。国を守るために、島を基地にする……。とても大きく、正しく聞こえる理由だなと思いました。けれど、そう聞かされても、僕は国のために与那国島が犠牲になるようにしか思えませんでした。

第二次世界大戦後、日本は戦争を起こした償いとこれからの平和のために、沖繩をアメリカに渡しました。そのため、沖繩は戦争が終わっていても本場の意味での平和を得ることなく二十七年間も暮らしてきました。やっと日本に復帰し、やっと本土と同じような生活ができるようになってきたというのに、またかと僕は思いました。

戦争中に疎開先の台湾で生まれた祖母は、戦争中に亡くなった兄の話や戦後島に戻ってくるまでの苦労話をよく話してくれます。そして、決まって最後には「戦争を体験した人たちが高齢になつて、身近にほとんどいなくなつた今、戦争の恐ろしさや歴史を、これからの時代を生きていくあなた達がしっかり受け継いで、次の世代に伝えていかなければならないよ。」と言います。その言葉の意味が、今、与那国島の自衛隊配備の件でもっと胸に突き刺さるものになりました。戦争を知らない人達だからこそ、武力には武力で対抗する方がいいと思いついたのだと思います。本当は、そんな方法では解決できないのに……。

僕たちは、小さい頃から人をなぐつてはいけないと、喧嘩で負けない方法を考えるのではなく、どうすれば喧嘩をしないですむかを考えなくてはならないと教わってきました。これは人対人のことだけではなく、国対国も同じだと思います。

これから先、与那国島の自衛隊基地がどうなるか今は誰にも分かりません。それでも、僕は、毎日を当たり前前に過ごさせていることに感謝し、一生懸命生きるといふ僕一人でもできる平和な行いをしていきたいと思えます。だって、一人ひとりが平和を創るのだから。